彩の山　埼玉支部報 第 36 号

《題字　松本敏夫》

【目　次】

新年度に向けて　大山光一　1
山行報告
水沢山　坂倉理恵・渡辺徹也　3
日向山　坂倉理恵・田中麻志帆　6
大野アルパイン道場①　安斎久美子　8
大野アルパイン道場②　小玉和孝　10
両神山　行方真由美　11
那須（茶臼岳/朝日岳/三本槍岳）生田祥子　13
ふれあい登山報告　中嶋信隆/坪井沙也子　16
同好会・平日山行倶楽部　高橋　努　18
鳴神山でカッコソウ
残雪の雪上訓練　高橋　努　19
山岳古道調査ＰＪ活動報告　鴨志田隼司　19
山の本棚シリーズ④　小原茂延　26
新入会員自己紹介　林　信行　28
事務局より　林　信行　29
編集後記　橋本久子　30

新年度に向けて

支部長　大山光一

４月１０日（日）埼玉会館に於いて、３年ぶりに第１３回埼玉支部通常総会を開催しましたが、コロナ禍、高齢者の多い支部事情を考慮して、恒例の懇親会は中止しました。

通常総会で、新たな埼玉支部の活動方針が承認され、各委員会が掲げた活動計画の完全消化に向けた取り組みを期待しています。その一方で、組織運営に関わる支部委員としての自覚、役職を担う心構えに関する意識改革を図りたいと思います。無責任な発言や行動により組織運営に混乱を生じ、無意味な時間を費やした反省があります。

今まで、埼玉支部の事業は委員会で実行する。委員会のやることは委員会任せ、人事も委員会任せという暗黙の慣習があるように見受けられます。

また、一部の委員会において、個人的な発言、あるいは少数意見で、計画や担当が決まっていく。委員会の総意で決めたように、そこに至った経緯の説明もなく、唐突に配信され、既成事実として表面化してしまう。そういう悪しき慣習を変えたいと思います。

支部委員会の存在が軽視されている、そんな印象に組織運営の危機感を覚えます。勿論、人材不足が大きな要因として挙げられます。

今後、組織運営に関わる、埼玉支部の方針・方向性は支部委員会で決めます。各委員会は、委員長及び副委員長を中心に、新たな企画や活動を可視化、個々人への負荷軽減を図り、担当する業務が遂行できる体制を構築することで、事業の継続が蓄積され、埼玉支部の組織強化と行動につながると確信しています。

そのためには、各委員会に関わるひとり一人が与えられた任務、役割りを果たすために、報・連・相（報告・連絡・相談）を重ねることで、将来に向けた体制強化につなげたい。

また、埼玉支部の抱える課題のひとつは、やま塾卒業生と実践を重ねた登山者、現役で活躍されている諸先輩方､それぞれの塊を風船に例えれば､埼玉支部の旗に結ばれているように見えますが、じつは、それぞれの風船の論理や解釈で自由に空間を彷徨っています。

したがって、傍目には風船の形は同じように映りますが、中身がまるで違います。固い絆で結ばれた諸先輩方の登山経験、一人でも登山を楽しめる登山者、新たな山への知識を求め、行動力に溢れる新入会員、三者三様の思惑があり、相互理解が希薄だと見受けられます。

それぞれの塊の融合を図るため、三つの風船を埼玉支部という串に刺したいと思います。それは埼玉支部が山を登る会だからです。安全登山を実践するために、その傘に寄り添う個々人の山への想い、立ち位置は同じだと思うからです。

かつて、日本山岳会に入会することは、岳人の憧憬でした。まさに、魅力ある組織であり、象徴として威厳に満ちていました。しかし、山との関わりが多様化し、より高みへ、より困難を求める登山者が減少し、時代の流れとともに組織も変化を求められ、今日の山岳会の体制になったと理解しています。残念ながら、埼玉支部に於いても精鋭的な登山を実践する登山者はごく少数です。

先輩からの教示や伝統で築いてきた組織の論理が、登山者の減少、高齢化問題、若年層の未入会や組織離れ、等々。山積する課題を鑑みると、組織運営の難しさが容易に想像できます。しかし、現状に甘んじることなく、新たな魅力ある組織づくりを図ることが急務だと認識しています。

一方、指導者不足、リーダー不足が問われている折、新入会員の入会は、組織運営からは大きな希望になりますが、懸念材料も抱えています。浅い知識と体験で、ロープワークや三点支持を必要とする岩場の通過や冬山に憧れてピッケルやアイゼンが必要な場所に安易にチャレンジする。

そんな遭難予備軍の誕生を回避すべく、諸先輩方の体験を重ねた経験値を語り、アドバイスをお願いしたい。それは登りたい山に行くのではなく、登れる山を登るということです。

体力は勿論ですが、ひとり一人が必要な知識と技術を学び、ガイド登山やツアー登山に参加することなく、埼玉支部の仲間同士で、百名山や冬山にチャレンジすることが当面の目標です。

安全な登山なんてありません。そして遭難のシミュレーションもありません。すべて先人の尊い犠牲でしか学べないのです。

「仲間の安全・家族の安心」を掲げるのは、誰一人、遭難や事故に遭遇してほしくないからです。埼玉支部に集うひとり一人が、その基本を学び、高い知識と高度な登山技術を備えれば、登れる山域が広がります。

【山行報告】４月度月例山行「水沢山（浅間山）1,194m」

山行委員　坂倉理恵

◆日程：2022 年 4 月 16 日(土)

◆場所：群馬県　水沢山（浅間山）1,194m

◆参加者：(敬称略）吉田寛治、浅田稔、田中麻志帆、東洋子、渡辺徹也、那須朋美、飯野和子、(CL)山崎保夫　（SL）坂倉理恵、　稲越洋一

◆行程：水沢観音駐車場 AM9：00 集合

水沢観音登山口 9：00→　おやすみ石 10：00→　石仏 11：00→　水沢山山頂 11：20 集合写真を撮り伊香保方面に下山　→電波塔を過ぎたあたりで昼食 11：55～12：20　→水沢山登山口 12：25→　つつじが丘休憩所 12：35 トイレ休憩、記念写真→　上ノ山公園入口 12：55→　ロープウェイ見晴駅 13：00→　関東ふれあいの道で伊香保神社 13：30 山行終了

集合場所の水沢観音駐車場は、さっきまでの雨雲を吹き飛ばすような爽やかな風が、桜吹雪を運んでいました。前日までの台風の余韻で、朝、家を出る時はまだ雨が降っていたにも関わらず、山行開始の時間になると、待っていたかのように太陽が顔を出してくれました。

急登を頑張ります

今回はじめて支部山行に参加した新入会員を含め、10 名で水沢山山頂を目指しました。

境内の中にある登山口の鳥居をくぐり、いきなり急な階段。このルートは階段が多いのが特徴でしょうか。距離はさほど長くなく、標高 580mの水沢観音からスタートして、急登で標高を稼ぎます。

途中の「おやすみ石」には石の上に野鳥のえさが置いてあり、人に慣れた野鳥が集まっていました。

見晴台：十二神将石仏群

すれ違う登山客は、地元の方が多いようで、「今週 3 回目」とか「4600 回来ている」といった常連さんばかり。地元の方々に愛され、トレーニングとしてもリピートされている山であることがうかがわれました。

息も上がり、木々に囲まれた道に飽きてきた頃、やっと目の前が開け、渋川の街を見下ろす絶景が目に飛び込みます。そこには十二神将の可愛らしい石仏が。事前に稲越さんが作ってくださり、参加者の皆さんに配布しておいた十二神将の一覧表の実物を、興味深く見たり写真を撮ったりしました。

ここまで来ると山頂は目の前。最後の下り、登りの後、間もなく登頂です。

山頂は狭いため、集合写真を撮って、他の登山客の邪魔にならないように 360 度の大パノラマに

後ろ髪を引かれながらも早々に伊香保温泉街に向けて下山を開始しました。2 月、下見に行った日があまりにも快晴で、谷川岳、至仏山、燧ケ岳をはじめ、反対側には富士山も頭を覗かせ、ぜひ本番当日もこの絶景を参加者の皆さんに見て頂きたいとの願いが叶い、良かったです。

稜線は風が冷たく吹き付けましたが、痩せた尾根を下りきったあたりでは風もなくなり、ピストンが多い山なので、人も来ず、登山道を外れた平坦な地面の上に座ってランチタイム。行きの登山口とは山の反対側になる「水沢山登山口」に出ると山道も終わり、一度車道にでて、伊香保森林公園、上ノ山公園の中のハイキングコースを通りながら標高を下げて行きます。

伊香保神社

ロープウェイというエスケープもありましたが、誰も使わずに関東ふれあいの道を伊香保神社へのきつい階段を下って山行終了となりました。

伊香保温泉街の街並みを見ながら、温泉まんじゅう元祖のお店でお土産を買ったり、一個売りをその場で食べたりして、水沢うどんを食べて帰ろうと、結局参加者全員で、タクシーで水沢観音のある水沢うどん街に戻りました。（タクシー代一人 462 円、10 人で 2 台に分乗）元祖田丸屋さんで、みんなでうどんを食べて解散となりました。

ここまでが係りの目論見だったのですが、怪我や事故、予定時間の遅れもなく、うどん街の 15 時閉店という時間に間に合ったのは、参加者の皆さんのおかげです。ありがとうございました。

水沢山山行に参加して（感想）　山行委員　渡辺徹也

この日は、前日まで日本へ接近する台風の影響で不安定な天気が予想され、雨具を着ることも覚悟していました。しかし、雲間から覗く陽射しには、これを覆す力強さがあり、山からの眺望を期待できるのではと淡い期待さえ抱きました。

今回の山行では水沢うどんに寄りましょうとのお話があり、下山後のうどんが楽しみです。

山行は９時集合・９時１５分出発の予定でしたが、参加者１０名が揃ったため、９時すぐに出発。まずは、登り始めはゆっくりのペースでスタートし、給水休憩を適宜取りながら順調に登ります。

水沢山頂手前の十二神将の石仏前でしばしの給水休憩とお参りを行いました。この石仏は、薬師如来とこれを守護する十二神将たちとのことです。その後、山頂に到着するも山頂が狭く、風が強かったため、しばしの休憩を取るのみで通過。台風の影響なのか尾根筋に出ると風が強く、体感温度も下がり、油断すると帽子が飛ばされそうな勢いです。お昼を取るための場所を探しながら緩やかな下りを進みます。風が弱く樹木がまばらで平らな場所を見つけ、情

報交換しながら各自持参の食料を取りました。

昼休憩後は、少し急な登山道を注意しながら下り、舗装道へ出たあたりからペースを上げました。(何故って、うどん街のお店のほとんどが、午後３時には閉まってしまうので、その前にはうどん屋さんに滑り込みたいのです。) ゴールの伊香保神社が近くなると、石段の道になります。石段が土の道と違うのは、一歩一歩の歩幅が決められペースが上がりません、が、兎に角　各自のペースで急ぎ、ゴールの神社へ急ぎました。ここが予定のゴールですが、参加者全員が水沢うどんを食べたいということで、うどん街までのタクシーを幹事さんが予約してくださいました。

伊香保神社から 300 段以上ある石段街を下り、途中で名物の温泉まんじゅうを買いながら、タクシーが待つ石段街下を目指します。

２台のタクシーへ分乗し、田丸屋うどんへ到着。少し待ち、水沢うどんの喉越しを楽しみ、無事解散しました。

リーダーの山崎さん、幹事役の坂倉さん、広報の稲越さんへ感謝です。お世話になりました。また、参加されました皆様と楽しい山行になりました。

【山行報告】４月度平日山行「日向山　1,660m」山行報告

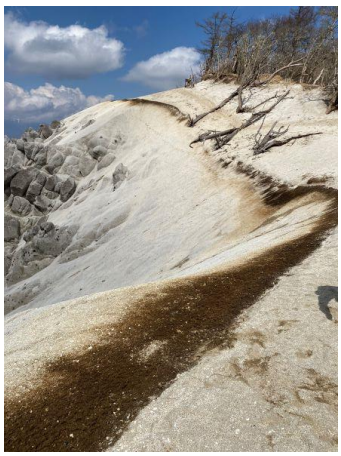
山行委員　坂倉理恵

＊日程：2022 年 4 月 20 日(水)
＊場所：山梨県　日向山　1,660m
＊参加者：（敬称略）高橋努、米山英三、野口勝志、加藤満、橋本久子、田中麻志帆、浅田稔、
（CL）東洋子　（SL）坂倉理恵
＊行程：道の駅はくしゅう　午前 10 時　集合
矢立石登山口 10：55　（カラ松林の中を登る）→山頂三角点 12：30→12：35 日向山 13：40（ピストンで戻る）→山頂三角点 13：45→14：45 矢立石登山口

今回は平日山行なので「平日」の特典を生かした山に行きたい、そう考え CL が思いついたのが南アルプスの日向山である。一番山頂に近い矢立石登山口の手前のゲート付近には、数台の車しか止められず、そこがいっぱいなら、甲斐駒ヶ岳黒戸尾根の登山口と同じ、尾白川渓谷駐車場に停めなければならない。

ここに停めると約 1 時間のロスタイム。なんとか矢立石に駐車できれば幸いだ。

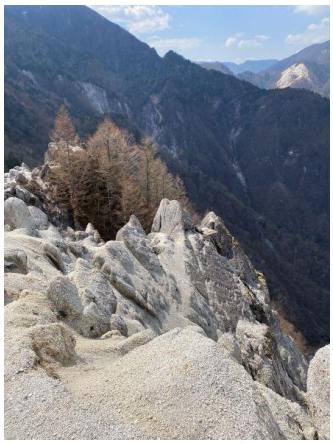
道の駅はくしゅうには、3 台の車に 3 人ずつ乗り合わせ集合した。そこで更に 2 台に絞り、約 20 分で矢立石登山口へ。スペースがあり、思惑通り 2 台とも駐車することができた。「平日」はありがたい。



登山道は、最初から最後まで歩きやすく、枯れ落ちたカラマツの葉がクッションとなり、足に優しい。

すっと伸びたその木がまっすぐで気持ちがいいね、などと話しながら山頂をめざす。時折、聞こえる鳥の声に耳を傾け、あれは何の鳥だとその姿を想像しながらの緩やかな山歩きが清々しい。

囲まれた一角にある三角点を通過し、雁ヶ原と呼ばれる花崗岩が風化してできたザレ場に到着。
ここが楽しみにしていた「天空のビーチ」だ。

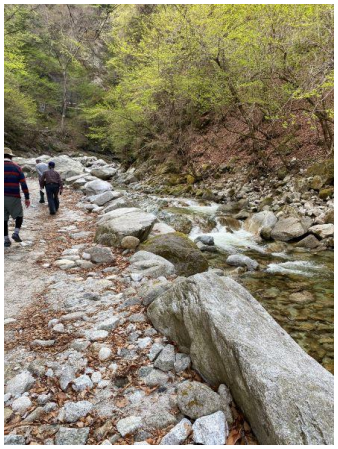


どこまでが海岸に似ているのだろうと半信半疑でいたが、そこは目を疑うほどのまさにビーチだった。真っ白い砂の背後には、海ではなく山々が見える不思議。覗き込んだらアリ地獄のように吸い込まれそうな谷底。すべてが想像以上に素晴らしい風景だった。

みんなでビーチにシートを敷き、ランチタイム。期待していた甲斐駒ヶ岳は、残念ながらわずかに山頂が少し見える程度だったが、八ヶ岳連峰を見ながら、贅沢な時間を過ごした。

集合写真を撮り、行きに通過した三角点に寄って下山。
せっかくなので、甲斐駒ヶ岳神社と尾白川渓谷に寄っていきましょうとの CL の提案で、車を駐車場に移動。神社にお参りし、橋を渡って千ヶ淵という滝まで尾白川沿いを散策した。ミヤマカタバミの群生やネコノメソウが可愛かった。そういえば日向山の登山道にはほとんど山野草が咲いていなかったのは地質のせいなのだろうか。

道の駅はくしゅうに戻り、お土産を買ったり、日本名水百選の尾白川の水を汲んだりして、3 台の車はそれぞれの帰路についた。高速道路の渋滞もなく、南アルプスはあっという間に遠ざかっていった。



ご一緒してくださった皆さま、ありがとうございました。

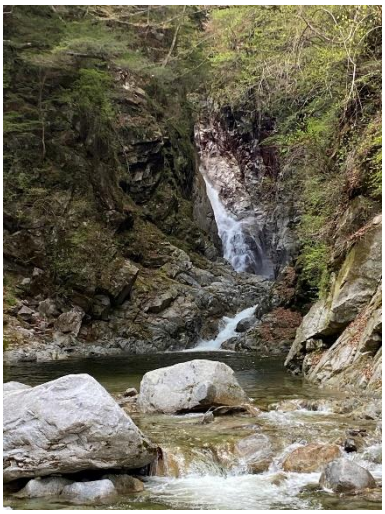
日向山山行に参加して（感想）　　山行委員　田中麻志帆

当日の朝は雨が降っており天気が悪く、不安を抱えたまま自宅を出発しましたが、山梨県に入ると一気に晴れ、天候に恵まれた山行となりました。

11 時に矢立石登山口を出発し、なだらかな道を登っていきます。

山頂付近の雁ヶ原には白い砂浜が広がっているとの情報があったので、いつ頃砂浜が現れるのか心待ちにしながら登っていきましたが、中々砂浜は現れません。

山頂に近づくにつれ、徐々に白い砂や石が現れ、雁ヶ原に到着すると、これまでの笹に囲まれた登



山道と一気に雰囲気が変わり、青い空と美しい砂浜が広がっていました。甲斐駒ケ岳や八ヶ岳の山々の素晴らしい眺望を得ることもできました。
日向山は低山ながら、樹林帯と花崗岩の風化した不思議な風景を堪能できる山で、とても楽しい山行になりました。
下山後は駒ヶ岳神社と尾白川渓谷を訪れました。
尾白川は日本名水百選に選定されており、エメラルドグリーンの千ヶ淵を見たり、ミヤマカタバミやネコノメソウなどの植物の話で盛り上がりました。秋には紅葉と滝でとても綺麗な景色が見られそうです。
低山ながら、様々な見どころがある日向山にみなさんも行かれてみてはいかがでしょうか。

【山行報告】山行リーダー勉強会・補助ロープワーク入門①

会員　安斎久美子

①JAC 埼玉支部【山行リーダー勉強会・補助ロープワーク入門】
②実施日時：2022 年 4 月 17 日　10 時 00 分～16 時 00 分頃
③場所：大野アルパイン入門道場
④参加者：轟、安斎（2 名）
　　大山支部長が途中参加
⑤天気：曇り
⑥内容：チェストハーネスの確認、基本のエイトノット、クライマーの墜落防止とビレイヤーの自己脱出の実施

大野アルパイン入門道場全景

- チェストハーネスは、比較的ダイニーマ製よりもナイロン製のスリングのほうがいざという時に痛くない。結び方について、三方を確認して抜けが無ければ完成。何処か一方が動くようであれば、再度やり直しである。
- 確保器とカラビナの向き
  基本的なことではあるが、ビレイループに掛ける際、確保器とカラビナの向きを予め合わせておく。利き手によってカラビナのゲートの向きを変えるだけでビレイループへ装着、またそのままロープを掛けるのみと煩わしくならずに済む。
  ロープを掛ける際はロープが確保器のループの右側か左側か、それにより今回のような自己脱出の際などビレイデバイスからロープを外す手間がひと手間で良くなってくることを考えてロープ掛けることも大切である。
- 大野氏より非常に大切なご指摘を頂戴する
  「何よりもまず、現地に着いてから装着するものはヘルメットであること。」
  現場では自然落石や、既に登っている人がいる場合はそれに伴う落石等が考えられるため。ま

た、ヘルメットを被った際は当然ながらヘルメットが動かないことが前提。おでこまでしっかりと被らなければ意味がない。

- クライマーの墜落防止とビレイヤーの自己脱出に挑戦

支点がある場合とない場合の、リードクライマー(今回はタイヤ 3 本 58ｋｇ）の人が落ちた時の負荷の掛かり具合やビレイヤーの自己脱出などを繰り返し実施。

大野さんの指導の下、ビレイヤーの支点作り

自己確保の際に気を付けておきたい点は、自分が届く範囲での支点設置をすること、その際のカラビナの掛け方の向きやスリングの長さ、それらの道具への力の掛かり方の意識、ロープを外す際のバックアップの設置、また支点から角度が開かない方が負担は少なくて済むなど、指導を頂く。

落下した際に確保器だけで止めるのではなく、合わせてロープを自分の体の脇へ引っ張りこむことでさらに止める力を強くできる。

※確保器があるからと言って、自分の体重以上の体重の人を止めることは非常に難しい。現場での落下は突発的に発生するだろうし、そうならないためにビレイヤーは常にリードの人から目を離さない様にすることや、見えない箇所ではロープの進み具合のみで状況を感じとるわけだが、それでも確実に止められるかと言ったら正直なところ不安はある。

加えて、自己脱出でロープを外す際はバックアップをしているとはいえ、いきなり外さないようにすることが望ましいだろう。

また、バックアップで使用するプルージックコードだが、Φ8mm×L60cm をダブルフィッシャーマンズノットで作成して 1 本は持っておいて損はないと思われる。法律でも推奨されているとのことである

⑦感想：ロープワークは、結び方はもちろん、道具への力の掛かり方も理解しないといけないために数度の講習会を受けただけで得られる技術ではない。そのため、学んだことは意識的に復習することがとても大切だと考える。ロープを使用した実地での一人練習は非常難しいと思うので、こういった講習会などにはなるべく多く参加していきたいと思う。

また、山は一つの場面を想定してその場面しか起こりえないという場所ではないため、頭の柔らかいうちにほんのちょっとした技なども含めて様々なノウハウをインプットしていき、自分の引き出しを増やしていくことができたらどんなに良いことかとも思った。いつか挑戦してみたいと思うバリエーションルートを歩けるようにするためにも、今後もますます努力していきたい。

最後に、今回ご指導いただきました皆様に感謝申し上げます。引き続きご指導の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

※今回、参加者が 1 人で、クライミングを始めていること、ロープの結びの基本をマスターしていることから、ビレイヤーの自己脱出まで練習できました。轟より

【山行報告】山行リーダー勉強会・補助ロープワーク入門②

山行委員　小玉和孝

JAC 埼玉支部**【山行リーダー勉強会・補助ロープワーク入門】**岩トレ①結び方基本 4 ケ
実施日時：2022 年 5 月 7 日（土）10 時 00 分～15 時 30 分頃
場所：大野アルパイン道場
参加者：轟、小玉、行方、田中、安斎（5 名）
天気：曇り
実施内容：エイトノット，ボーライン，ムンターヒッチ，クローブヒッチの実施、ムンターヒッチを使った懸垂下降の確認

・ エイトノットとボーライン結び
固定をすることでよく使われるこの 2 種。かつてはボーライン結びが主流であったが、外れそうになることがあるとのことで今はエイトノットが主流となっている。
ボーラインもエイトノットもいざという時に他人に対して結ぶ可能性もあるため単純に結ぶ場合、自分の体に結ぶ場合、他人（今回は椅子や柱などで代用）に結ぶ場合などを体験した。

▼ボーライン結びを実践中

・ムンターヒッチ
クライミングなどでリードの人がセカンドを引き上げる際の引き上げシステムなどに使用される。動かすことが可能。

・クローブヒッチ
ムンターヒッチと違い、止まる。これを利用して、ツエルトを立てる際の支点に使用したりなど汎用が高い。エイトノット等とは異なり、止めながら調整が可能。

・ ムンターヒッチでの懸垂下降
ムンターヒッチを使用して、ハーネスを装着した上でボルダリングの壁上部から下降を体験した。高さやロープに吊られている感覚、ロープをもっと頼っても良いという感覚などを確認。

▼自己確保の上で、ムンターヒッチでの下降を説明中　　→

岩トレ　参加者の感想

安斎久美子：エイトノット、ムンターヒッチ、クローブヒッチは非常によく使用するために何度も実施して身に染み込ませたい結び方である。これらはどこでも練習が出来るため、忘れないように家での練習が欠かせないだろう。ロープを使って壁を下りる感覚や、ロープが命綱だという感覚も実際にやってみないとなかなか慣れないし、分からない。こちらはなかなか一人では練習できるものではないので、少しでも構わないのでこういった経験が出来る場が少しずつ増えて行ったら良いと思う。またこういった場を増やすには、興味を持つ人を増やさないといけないのかもしれない。安全を意識して行動するには、学びと実践が絶対的に必要であると思う。

行方真由美：登山をするには万が一への装備が必要という認識が不足していた事に気がつくきっかけになりました。1 本のロープの結び方で用途が変わるのがとても面白く感じました。

田中麻志帆：今回、初めて山行リーダー勉強会に参加しました。ロープやスリングやカラビナの種類とロープの結びの特徴を学び、用途によって使う道具が異なるので、使用する道具が何を目的とした道具なのかを理解することが大事だと思いました。最後にジムの壁でセルフビレイのセットとムンターヒッチで懸垂下降をしましたが、一つ一つの手順に時間がかかってしまいました。頭で理解をすることに加え、何回も練習を行うことで体でも覚えていかなければ、山行中にロープを使用する場面があったときに対応が出来ないと感じました。今回教えていただいたことを復習し、今後の山行に役立てたいです。ありがとうございました。

小玉和孝：基本的なロープワークの勉強が出来ました。４タイプのロープワークですが、その場ではなんとか出来るようになりましたが、家に帰って復習してみるとなかなか出来ませんでした。これでは、いざという時は全く役に立ちません。繰り返し練習して、マスターしていきたいと思います。昼食をとりながら、色々な体験談をお話し頂き大変参考になりました。今後の登山に活かしていきたいと思います。また、最後に懸垂下降の体験もでき、大変有意義な１日でした。これからも機会があれば、講習会に参加して安全登山に努めたいと思います。

【山行報告】５月度月例山行「両神山（100 名山）1,723m」

山行委員　行方真由美

＊日程：２０２２年　５月１４日（土）

＊場所：埼玉県　両神山（１００名山）　1,723m

＊参加者：(敬称略) 大野　国光、立原 由子、那須 朋美、田中　麻志帆

(CL) 小玉　和孝、(SL) 行方　真由美

＊行程：白井差登山口 9：00⇒分岐 9：20⇒水晶坂 10：00⇒ブナ平 10:20⇒稜線鞍部 11：10⇒両神山 11：30

⇒下山開始 11：45⇒合流点 11：55⇒ブナ平(昼食 12：10⇒下山開始 12：30)⇒登山口 14：00

新緑の眩しいマイナスイオンたっぷりの両神山でした。

登山ルートでも比較的行動時間と標高差の少ない(900m) 白井差新道ルートで登りました。

4 月 2 日の下見は山頂は雪でした。本番の山行は山頂から景色を見たいと思っていましたが予報は雨のち曇り。

それも前日には関東今年最大級の大雨の予報でした。直前まで決行できるのかと心配でしたが、天気が回復してくれました。

当日の予報があまり良くなかったので、渋滞の心配をしていた関越道も渋滞なしでスムーズに流れて登山口(標高 850m)のある山中様のお宅の駐車場に予定より早く到着できました。

白井差新道登山道を管理されている山中様は、登山道の管理の他に両神山周辺の山岳警備隊で遭難者の捜索、遺体の回収などもされていると下見の際には身の引き締まるお話を聞かせて頂く機会がありました。

当日は登山道の整備に出られていてお話を伺う事ができませんでしたが、山行中にスコップを持ち整備をされている山中様にお会いする事ができました。登りで疲れ気味でしたが山中様に会えた時はほっとした瞬間でした。

心配していた雨も登山開始後すぐ止んでくれてお天気が回復してきたので今度は蒸し暑さが大変でした。

それでも標高が上がってくるとひんやりとした風が心地よく感じられ山頂付近にはアカヤシオも見ることができました。

山頂到着後は遠くの山並みは霧の中でしたが、他の登山者も居なく貸し切りでだったので、のんびり写真を撮ったりしている内に霧が晴れて遠くに富士山が見えた時は、みんな思わず自然とワァーと声が上がり本当に嬉しかったです。

下山の途中で昼食を取り下山後、登山道整備費 1000 円を支払い両神山バッチを頂き解散しました。

山行委員として初めての山行無事に終えられてほっとしています。

参加者の方々ご協力＆楽しい山行ありがとうございました。(行方)

※両神山白差新道ルートは山中様に事前の予約が必要です。

◆参加者の感想

立原由子：前日一日中雨、当日朝 4 時半ごろ雨がやんでいて、よかったと思っていたら、家を出るころ、6 時前から強く降り出す。集合場所の東上線若葉駅に向かう。両神山は登ったことがなく、行けるか心配だったのです。車の中で楽しく会話し、頑張って登ろうという気持ちと雨がやみ、ほっとしました。しかし下見をされたリーダー、サブリーダーの会話で最後の鎖のところが滑るかもしれないと聞き、また不安になりました。歩いているうちにそれ程困難なところもなく、頂上に到着。しばらく誰も登ってくる人もなくて貸し切りでした。ヤシオツツジが咲いていて、なんと富士山も見られて感動しました。朝の雨が嘘みたいと思われました。山頂から 600m降りたところで昼食、下山開始する。行きは登りだけで疲れを感じましたが、下りは岩も乾いていて楽しく降りられました。私にも登ることができたことを嬉しく思っています。企画をしていただいたリーダーさんサブリーダーさんに感謝します。

大野国光：５月１４日の朝は、前日からの雨が残りましたが、登山開始の９時前に雨は上がり雨具無しでの山行に少しほっとしました。山頂まで最短距離の白井差新道ルートで山頂を目指します。歩き始めて間もなく、新緑に映える昇竜の滝を眺めながら進みます。新緑と渓谷の美しさに心が洗われました。来て良かったと実感した瞬間でした。その後急峻な杉林を登りますが、いつの間にか杉林から広葉雑木林の、新緑が美しい中腹へ到着します。振り返れば雲海とその先に浮かぶ山並みが何とも神秘的でした。遠くにうっすらと青空ものぞきましたので気持ちも高揚してきました。山の上を見上げれば稜線も近くに見え、右上に山頂と思われるのぞき岩が見え高揚に拍車がかかりました。そして最後の岩場・鎖場が見えます。いよいよかと思い鎖場を登ります。無事着きました。瞬間的ですが晴れ間が広がり、遠くに富士山を望む 360 度の眺望に感激しました。とても楽しい両神山登山でした。

【山行報告】５月度月例山行「那須岳（茶臼岳、朝日岳、三本槍岳）」

山行副委員長　生田祥子

1. 日　　程　5 月 28 日（土）～29 日（日）一泊二日

2. コースタイム

28 日（土）9：30 峠の茶屋駐車場～10：30 峰の茶屋跡避難小屋～11：30 茶臼岳～12：30 那須ロープウェイ山頂駅～13：00 牛ヶ首～13：40 姥ヶ平～沼原分岐～15：00 三斗小屋温泉煙草屋

29 日（日）7：30 三斗小屋温泉煙草屋～8：45 隠居倉～9：40 熊見曽根～10：00 清水平～11：00 三本槍岳～11：50 清水平～12：10 熊見曽根～12：40 朝日岳～13：30 峰の茶屋跡避難小屋～14：30 峠の茶屋駐車場

3. 参加者　８名（男性４名、女性４名）

28 日早朝に那須岳の登山口に集合した時、雲はあるものの青空で天気がよく、最高の登山日和のようでした。参加者各自自己紹介して、加藤さんをトップに出発しました。樹林帯を過ぎ、少し歩くと赤い屋根の峰の茶屋跡避難小屋が見えてきました。硫黄の匂いが強くなってきました。この付近の雪渓はここ数日の暑さで、溶けてしまったようです。避難小屋で少し休憩をとり茶臼岳に向けて出発しました。風が強い中、大小の岩がゴロゴロある道を一歩一歩踏みしめて歩きました。そして小さな新しい祠が見えてきました。頂上です。慌てて支部旗を出して写真撮影。風に飛ばされな

いように旗を畳み、ロープウエイ山頂駅に向けて出発しました。山頂駅で長めの休憩をとり、三斗小屋温泉煙草屋に向けて出発しました。今度は下り中心です。途中、木々に花が咲き、疲れを癒やしてくれました。しばらく樹林帯を歩いて行くと、突然古めかしい山小屋が見えてきました。今夜宿泊する煙草屋旅館です。受付し、部屋に荷物を置くと名物の風呂に入り、食事まで 1 時間程度あるので、飲み物（アルコールやコーラなど）を飲みながら座談会。山の話で盛り上がりました。夕食はなんとサイコロステーキ！ほかにも 3 種類以上のおかずがあり皆さんご飯を山盛りにしていました。食後は消灯前に、いつの間にか寝てしまいました。

次の朝､風呂に入るために早起きして朝食｡本物の温泉卵やソーセージなどおかずがたくさん、ご飯も山盛りいただきました。そして三本槍岳に向けて出発しました。今日は風が収まっていますように！まずは隠居倉までの登りが核心です｡隠居倉までくると、なんと景色のよいことか！遠くに雪を被った山々が見えます。ただし、残念ながら風は今日も吹いていました。その後、三本槍岳、朝日岳と続けて登頂しました。途中クサリや雪渓の箇所がありましたが、特に問題なく通過できました。

今回の山行では、風が強かったものの、天気がよく、温泉もありで、印象的な山行になったことと思います。

初めてひとりリーダーとしての自分は、まだまだ経験不足で、今回、先輩方にたくさん助けられました。もっと経験と知識を積み上げていかなければと思っています。

那須岳

登山口

茶臼岳

牛ヶ首からの茶臼岳

オオカメノキ

茶臼岳をバックに(姥ヶ平)

三斗小屋温泉の歴史

煙草屋

夕食風景

煙草屋前にて

三本槍岳

朝日岳

朝日岳から下る岩場

朝日岳から下る鎖場

剣が峰近くの雪渓

GPS ルート Map

参加者の感想

生田祥子：今回、初めての単独リーダーで荷が重いと思っていましたが、参加者の皆さんに支えていただき、何とか怪我人もなく、楽しめた登山になったかなと思っています。山小屋も那須の山々もかけがえのない良い思い出になりました。私としては反省することばかりでしたが、今後の山人生に役立てたいと思います。

米山英三(三斗小屋温泉、煙草屋の思い出)：もう、50 年くらい前の事になりますが、今回それ以来です。宿の佇まい、昔と変ってませんでした。当時は、大変な登山ブームで、畳一畳に 3 人のスペースでした。今回は、大名旅行の気分！仲間の皆さんと、快晴に恵まれた新緑の那須の山々を楽しむ事が出来ましたが、ときおり吹く風が、ちょっとばかりワサビの役目を果たしてましたね！生田リーダー、先頭歩いてくれた稲越さん、皆さんに感謝です。ありがとうございました。

稲越洋一：那須岳への山行は、過去素晴らしい紅葉を見に訪れていますが、今回、初めて人気の三斗小屋温泉に宿泊しました。風情のある宿で、人数制限もされていたためか、ゆっくりできました。ほぼ快晴の中、いつもと違うルートで三座を巡り、同行の気が合った仲間たちと、楽しめた山行でした。生田リーダーにも感謝です。

町田美春：初めての那須岳にワクワクしながら参加させて頂きました。2 日間快晴に恵まれ青空の下、新緑や桜、シャクナゲ等の花々やうぐいす等鳥の鳴き声に癒されながら気持ちよく歩くことができました。那須岳は、ザレ場、ガレ場、高所などバリエーションが豊富で経験が浅い私にはとても勉強になりました。山行のもう一つの楽しみは、三斗小屋温泉煙草屋さんに泊まること。いつか行ってみたいと思っていた温泉でした。露天風呂から見る景色は最高でした。泉質もよく疲れがとれました。ご飯もとても美味しく完食しました。ただ一つ残念なのは、共同風呂に入れなかったこと。安全に楽しく山行ができたのは、先輩方のサポートのおかげです。ありがとうございました。

坂倉理恵：那須岳で初夏を告げるという、満開のミネザクラを何度も何度も通り過ごしながら、念願の那須岳三座に登頂しました。鮮やかな新緑が美しく、風に乗って届く硫黄の香りや、まるで火星のような荒々しい岩山。静かな山歩きと、険しいガレ場。様々な顔を持つ素晴らしい山でした。今回の山行では、学ばせて頂いたことが多く、感謝感謝です。支部山行の意義を感じました。今後の糧にしていきたいと思います。とても楽しかったです！

加藤満：この駐車場は平日でも早朝に満杯になる。今日私が到着したのは 5 時半なのだが、休日なので相当の車が駐車している。すでに明るくなっている空を見上げると、雲の流れは異常に速い。多分山は相当な風、那須の風は名物なので驚かないが歩きが遅くなるので少し不安でもある。8 名パーティでの歩行になる。リーダーの指示のもと歩き始める。今回の山行は三斗小屋温泉での泊まりの計画であり、私としては 30 年前の冬に泊まったことを思い出しながら歩くことにした。案の定三山とも風は強い。しかし、天気は良いので展望は素晴らしく良い。十分満足な山行でした。
生田さん、稲越さん皆さんお世話になりました。

浅田稔：この会に入ってからの初めての宿泊山行。初めて会うメンバーとの登山や宿での会話を含め楽しい２日間でした。体力的にちょっと心配でしたが、ゆっくりペースで疲れもなく歩けました。この山は日帰りで何度か来ていますが、茶臼岳をぐるりと回る縦走路を歩き、色々なコースの説明を聞けるなど経験豊かな方たちと話をしながらの充実した山行となりました。反省点は集合の事です。車で行きましたが、案内所の時刻に余裕を持って行ったつもりが駐車場は満杯、かろうじて２台の空きがあり停められました。この駐車場は６時頃には満杯になると聞き甘さを感じました。

奥村一江：1 日目は雲も見られましたが 2 日目は快晴で、なにより景色が素晴らしかったです。桜をはじめとした様々な花、独特な地層、皆さんとの会話も楽しかったです。何より、一度は泊まってみたいと思っていた煙草屋に宿泊でき、温泉も堪能出来て嬉しかったです。ありがとうございました。

大久保春美記念　第１２回ふれあい登山　報告

副支部長　中嶋信隆

埼玉支部に入会して 10 数年、まだ一度もふれあい登山には参加していませんでした。
まことに申し訳なく、今回初参加をしてこんなにすばらしい会があったことに感動すら覚えました。
関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

さて、2022 年のふれあい登山「大久保春美記念第 12 回ふれあい登山」は去る 4 月 3 日（日）寄居

町の遠足の聖地と言われている鐘撞堂山（329m）から羅漢山を経由して出発地の寄居町役場に戻る約 5 時間の安全なハイキングコースで行われました。

参加予定者は総数 75 名、その内訳は障害者 19 名と同伴者 17 名、日本山岳会埼玉支部関係者 35 名、障害者スポーツ協会 4 名です。例年よりも少ないとは言え、新型コロナの影響下でありながら大変多くの参加希望者でありました。

午前9時30分寄居駅前の寄居町役場広場での受付でしたが、残念ながら 2 組 6 名のご家族と埼玉支部 3 名の計 9 名の方々の欠席がありましたが最終参加者は 66 名です。
埼玉支部の参加者 4 から 5 名が各班に分かれてサポートを行いながら 7 班に分散しての出発です。

午前 10 時予定通り各班は間隔を開けながら、班長の号令に従い出発しました。
途中大正池、竹工房での休憩を入れ、予定よりやや早めに山頂着、楽しい昼食時間となりました。
昼食は 40 分ほどの予定でしたが雨が降り始めたため、滑って転びけがなどないように早めに下山をはじめました。

私が驚きましたのは参加者の皆さんが天候にもめげることなく非常に元気でそして質問も活発で、ご家族との会話もはずみつつ 2 時間の登りがあっという間であったことです。
それと障害者スポーツ協会、埼玉支部の参加者皆さんが懸命に会の進行に力をお貸しくださったことです。
おかげで一人の怪我人も出さず、途中から雨となりましたが楽しく元気に行動できました。

最後も皆さん笑顔で来年も絶対に参加するという力強い言葉も聞かれました。
私も今後このふれあい登山のために微力ながらお手伝いできればと考えております。
少し早いですがまた、来年のふれあい登山どうかよろしくお願いします。

ふれあい登山に参加して（感想）　会員　坪井沙也子

今回のふれあい登山は、私が埼玉支部に入会して初めて参加した行事でした。当日は、内心とてもドキドキしながら集合場所の寄居駅に向かいましたが、先輩方が気さくに声を掛けてくださり、和やかな気持ちで登山に臨むことができました。
3 班で登山をご一緒したのは、県内の知的障がい者専門入所施設の入所者さんとスタッフの方々でした。日々寝食を共にされているからか、施設の方同士、気心が知れていて仲が良く、毎年ふれあ

い登山を本当に楽しみにされていると仰っていました。その会話に時々交ぜてもらいながら、ゆっくりのんびり歩く山での時間は、とても穏やかなひと時でした。
コロナ禍での開催となった今回、感染症対策等、運営の方々におかれましては大変心を砕かれたこととお察しいたします。大変な状況の中、ふれあい登山を開催してくださり、また、貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

同好会　平日山行倶楽部スタート　～鳴神山
・・鳴神山でカッコソウを鑑賞しました！・・　評議員　高橋　努

同好会・平日山行倶楽部は 17 名のメンバーで 4 月から活動をスタートしました。年齢相応に無理はせず、密にならない平日に登山とプラスアルファを大いに楽しもうと張り切っています。メンバーの皆さんは豊富な経験で貯め込んだポケットはエンジョイの種で張り切れんばかりです。

4 月は群馬県桐生市の鳴神山にカッコソウを鑑賞しに行きました。前夜の天気予報は降雨確率 90%という絶望的な数値で参加人数も 6 名と減りましたが、さすが善男善女グループのパワーで雨雲を吹き散らし瑞々しい花の山を楽しみました。

藤の花が美しい

鳴神山山頂

6 月には東京多摩支部の奥多摩ベースキャンプに宿泊利用させていただき奥多摩むかし道を歩きます。平日山行倶楽部、なんか楽しそう！と感じた方は是非ご入会ください。

呼びかけ人：米山英三、清登緑郎、高橋努

カッコソウの花

残雪の雪上訓練

評議員　高橋　努

残雪の後立山で雪上訓練をしよう、ということでゴールデンウィークに私の大学 OB 会の山小舎の集まりを利用してこの１～2 年に入会された方々をお誘いした。雪上訓練をコーチいただくのは平川会員である。雪山入門は何と言っても残雪期の雪上訓練であり、多くの岳人が通った登竜門であろう。全身雪まみれになり、びしょびしょになって寒さに震え、そして雪に馴染んでいく。雨の遠見尾根、晴れたが寒気の入った八方尾根でそんな経験をされた。

さあ、次はどんな雪に出会うのだろう。

埼玉支部・山岳古道調査プロジェクト活動について

山岳古道調査ＰＪ　会員　鴨志田隼司

「山岳古道・古い山の道」とは，いったい何だろうか．

私たちが利用している登山道と何所が違うのだろうか．そうした素朴な疑問から「奥武蔵古道」を捉えてみたい．我が国は地理学的にも「山がち」な地形だと指摘されているので，人びとが広く文化的・社会的な交流活動をするには沖積平野や大河川を利用せざるを得なかった．山岳・山域地帯の交通利用は，原始時代の資源獲得のための道（ヒト−資源環境系の道）から古代の米と（イネ）と稲作に関わる道（自然改造はじまりの時代）へとつながる．

そのためか，古代には内海や河川の利用を積極的に行ってきた．それでも，中世武士の登場と，たとえば武蔵野の山野での牧（マキ）の成立と共に軍馬が通交できるほどの山道が奥武蔵と称される関東平野西側山稜地帯でたどられていったようである．

このように平安時代後期から人々は積極的に山道を通行の場として歩いていた．その兆候は摂関期までの荘園の国衙の圧迫から中世の荘園制が形成されたことから始まるようだ．近年，里山の環境と資源という見方から『中世荘園は耕地と山野を含めた領域を囲い込み，領主が自らの責任で荘園の領域を自由に開発・経営し，その結果を引き受けた結果，山野の資源活用も含めた農業生産の集約化が進んだ．近年「里山」という，村人が周囲の山野の産物利用を繰り返すことによって，生活に役立つ環境に改変された山野が「自然の持続利用」「生物多様性保全」の観点から注目されているが，この里山が史料に現れるのが室町時代からなのだ』（2015 水野）という歴史観が示された．

里山に利用可能な自然資源を求めたことや中世武士団の台頭が駄馬を必要とした結果，里山に作業道や村落間を結ぶ道さらには山脈を越えるほどの山岳古道を形成したと思われる．それには自然

を改造した人工物（山岳道・作業道・林道・村道など）を土砂崩れ，倒木，薮化などの自然災害から守るための整備，維持管理のための労力と費用を集団の結束とその地方の有力者に仰ぐ必要があった．“道は拓かれるのものではなく多くの人がたどることで自然にできるもの”（久保田賢次 2015）という視点は卓見であろう．

９～10 世紀の気候変動による相次ぐ天災は社会不安を招くだけでなく農業不振から荒廃する農村をうみだした．
京の都では新たな神まつりが始まった時期でもある．また，山岳等の大自然環境への畏敬と信仰やそれを支える山岳寺院の設立が始まったのもこの時期である．

ここで，「奥武蔵古道」を想定している地域に即して考えてみると，古代高山道・慈光寺道推定路（毛呂山町歴史民俗資料館 2018）周辺には 10 世紀を中心とした仏像が存在しており，9～10 世紀の社会的に世情が不安定な時代に多くの山岳寺院が設立されたことがわかる．

山岳宗教の拠点の一つである山岳寺院について，時枝努氏（坂詰 2003）は「平地寺院に対して，山地に立地する寺院をいう」，「～山岳寺院の場合，なぜ寺院用地にふさわしい平地ではなく，制約の大きい山地にあえて建立したかが問われなければならないであろう～」とした上で，神聖視されていた湧水と磐座の存在を指摘している．時枝は，山岳寺院創建の背景に，「聖地は行場として好適な場所であり，山岳寺院が僧侶の修行の拠点となったことも十分考えられる」とし「山岳寺院が平地寺院の僧侶が修行する場として機能していた可能性を示唆するものと考えられよう」と結んでいる．

山域は線では括れない，山脈が水脈で断たれる区分をそれぞれの山域とするならば，「奥武蔵」の範囲も自然と定まってくるだろう．すなわち，「奥武蔵」における山岳古道の存在は，荒川，入間川水系で囲まれた山々で展開された山岳寺院での歴史的活動の経緯を探ることになろう．

山間部で展開した歴史的な事象としては，山岳宗教とその拠点となった寺社の存在があげられる．寺社縁起・記録の史料としての代表的なものとしては江戸時代文化・文政期に編まれた武蔵国の地誌；新編武蔵風土記記稿（1830）がある．記稿は文化・文政期に編まれた武蔵国の地誌であるが，そこには山野の情報は僅かにしか記述されていない．

そこで山岳に関わる情報を明治 24，５年頃に纏められた，武蔵通志（山岳編）（河田 1891-1892）で記述された山名（嶽・山・峯）と峠名（嶺）をこの水系で囲まれた埼玉県の範囲に限って数えてみた．通志では 17 地域の山岳名を挙げているが，ここでは（奥武蔵の古道）調査に関わる，武甲山・大霧山・高山・笠山・越上山・東山・大髙山を埼玉県下の奥武蔵の古道調査の範囲と想定すると，嶽・山の座数は，埼玉県全数の約３割強の山名が記述されている．その多くは里山と呼ばれている低山である．一方，嶺（峠）では約６割弱の嶺（トホゲ）が記載されている．いずれもその位置は郡村および東西南北により示されている．峠には上り下りの両村の字名が明示されている．

例えば，峠の記述の多い越上山山域は一本杉嶺として「(入間郡) 瀧野入村阿諏訪の西にあり西南は高麗郡東吾野村長澤虎秀に跨がる・・・」と詳細に示されている．山名の記述には「太平（タイヘイ）山」に『高二千百六十尺黒山の西南にあり山上役小角彌勒不動石像あり慶應元年西戸村山本坊設立する所なり』とその位置と信仰施設を明らかにしており，古道調査の参考になる．記稿に大平山の記述がないのはこの霊場が比較的新しく開かれたのだろうか.

前述の記稿には，「入間郡黒山　オガミ山 登り二十町もあるべし，山上に秣場あり．又雑木並ひ立り．絶頂より望めば．郡中の村々は更なり江戸の方迄も遙に見るべし」と注目しているが，中世に越上山の山上に阿寺諏訪神社が祀られていたとの口碑を必ずしも伝えていない.

ところで，日本山岳会の全国山岳古道調査プロジェクト・リーダーからの報告③調査対象古道 120 案を，例えば，流通（経済），軍事（政治），信仰（修行），生活（生業）の四つのカテゴリに分けてみると，提案されたおおよそ 6 割強の古道が信仰（修行）に関わる古道である（近藤 2022).

そこで以上の事案に鑑み，山岳古道の捉え方を，奥武蔵の山岳古道を訪ねて –黒山・高山を巡る「交易（流通）の路」・「軍事（政治）の路」・「信仰の道」・「生活（生計）の径」–と課題を設けて探究することにした.

実際の探求調査では，「越生黒山地域から高麗川源流東側山稜をめざす山旅」シリーズとして，第５回まで踏査した．この報告では，その調査山行の概要に限って記す．詳細は現在まで実施された下見調査を経て正式な調査を終えた後に順次報告する次第である.

第 1 回「越生黒山から『秩父越生街道』を飯盛峠・樣峠へ」(実施日：2021 年 4 月 20 日，参加者数：２名)

概要：新編武蔵風土記稿入間郡小杉（コスギ）村の項に「村内に秩父郡への往還係れり．津久根村より入て比企郡麦原村に達す」と記述されている.「越生の歴史Ⅰ〈原始・古代・中世〉1997」によると，毘盧山大泉（寺）と称する天台宗の寺院が坊地と名づけられた戸神村大仏堂の地にあったという．この地は龍ヶ谷龍穏寺縁起に寺地の由来として記され，秩父越生街道，秩父街道と地元で呼ばれた尾根伝いの道が秩父大宮へ抜けて行く入口になる．この道は往時には駄馬も通れる程立派な堀切道で，秩父への商用・巡礼・夜祭り見物などに交通されていたようである.

飯盛峠を越えて秩父へ抜ける道の成立を考える際，秩父日野城にいた長尾景春が文明 12（1479）年正月 20 日（現在の 3 月初旬）に越生方面へ峠を越えて進出し，龍穏寺に初詣していた太田道灌と龍穏寺・小杉周辺で合戦をおこなったという歴史を刻んだ史実からも，中世以前に拓かれていたと推測できる．景春の軍勢が越えてきたのが秩父越生街道と思われる．明治 40 年測図の陸地測量部の地図にも梅園村小杉から分かれた戸神からの山道が龍ヶ入からの山道を合わせて飯盛峠へ至っているのが表示されている．里道聯路と記された尾根伝いの縦走路は，この先，樣峠，刈場坂山を経て，七曲り峠（アガリッキリ）から横瀬仲井へ降る駄馬道とさらに丸山を巻き秩父４番の金昌寺への徒歩道があったようである.

第２回「高山表参路（四寸道）と関八州見晴台・高山不動尊」（実施日：2021 年９月 25 日，参加者数：７名）

概要：高山不動は成田・高幡と共に関東三大不動尊の一つとして，昔からその道では聞こえ高い霊場で，俗に関八州見張台と呼ばれる不動堂裏の関場ガ原（堂平山）の頂上には大型の高堂が並び競っていたと云われている．昔の表参路は黒山側で，龍ヶ谷の龍穏寺の奥の院として建てられたからで，その道は下ヶ戸（さげど）薬師堂を起点に，龍ヶ谷川と越辺川とに挟まれた尾根をひたすら辿り，現在の高山不動尊奥の院に登っている．土地の古老の伝える俗称「四寸道」には不動の本参路として，達磨岩，碁盤石，かくれ不動，鏡岩，岳岩金比羅，四寸道などと命名された奇石や名跡が存在する．四寸道の核心部は蟻の門渡りと呼ばれる岩稜で，標高 630m の「岳岩霊場」には本山修験宗聖護院門跡末准先達の納めた碑伝（祈祷札）が遺されており，現在でも修験道の霊場で，「武嶽琴宮」の石碑がある．

本参路の道程は寛政 10 戊午（1798）年の碑文が刻まれた馬頭観音像がある七曲りへの巨岩の多い峡谷を登り，高山不動尊奥の院に至る．高山不動は不動堂と別当常楽院が遺されているが，明治新政府により出された神仏判然令以前には両部神道と本山修験山本坊が支配していた．虚空蔵山には吾野最古の石仏，寛文７丁未（1167）年の虚空蔵菩薩が祀ってある．萩ノ平コースと呼ばれる路は古仏の多い子ノ権現への参経路のひとつでもある．

現在，下ヶ戸薬師堂からの高山道は採石所のために遮断されており，バス停火の見下から龍ヶ谷龍穏寺にむかう横吹峠からが山道の入口となっている．この峠に二体のお地蔵様が祀られているが，横吹峠を越える道は明治４０年測図の地図には記入されていない，さらにお地蔵様に刻された「道しるべ」が示す方向が逆である．こうしたことから，この二体のお地蔵様は本来，下ヶ戸薬師堂の橋のたもとに祀られていたのではないだろうか．

第３回「黒山地区における地域小霊場と信仰遺物（石仏・石碑・石と磐）を辿る散策踏査」（2021 年 10 月 29 日，参加者数：７名）

概要：越生黒山地域は平安時代から中世に至る宗教施設や遺物が残されている．山岳や尾根を越えての「異境」の人々との交流・交易の歴史は黒山地域の大地に刻まれているが，その痕跡は幾多の歴史を経て，大きく変貌している．

修験道は日本古来の原始的な山岳信仰が，外来の宗教（密教・道教・儒教など）をとり込んで平安末期にはその宗教体系が確立したとされている．しかし，その本質は山岳信仰にもとづく超自然力の習得と，その力で呪術的な活動を行う実践的で儀礼中心の教義をもつ密教的な性質が強い．黒山に山本坊を開いた山伏は箱根山別当を称していたが，室町中期に越生黒山に移ったとされている．越生黒山の周辺を見渡すと，古代以来の聖地・霊場が少なくない．桂木観音（毛呂山町，曹洞宗）・岩殿観音（東松山市，真言宗智山派）・慈光寺（ときがわ町，天台宗）・高山不動（飯能市，真言宗智山派）・子の権現（飯能市，天台宗）・龍穏寺（越生町，曹洞宗）などは著明である．これら有力な大霊場に囲まれた中に，山本坊は「国峯修行場」を開山している．

「国峯修行」は，各地で設定された峯入りコースでの行場で，関東では相州八菅山（神奈川県愛甲郡愛川町）から丹沢大山へ峯入りする「国峯修行場」が有名である．黒山霊場もそのような“国峯”の一つとして，修行の場として使われた形跡がある．武蔵国入西・秩父地方における修験のセンターであった可能性はすてきれない．

この地域には中世以来在地の秩父氏一族の豪族的な武士，武蔵七党の一つである児玉党が存在した．越生にはその一族である越生氏の祖とされる人物が平安末の 12 世紀後半に越生郷内各地を拠点として支配を展開していた．中世に今市村と呼ばれた越生には近在の村々から山脈や尾根を越えて交易（流通）にきた．山伏は中世市場に深く関与していた．中世武士団と山伏の接点がここに生じ，「滅罪生善」を願う檀家である武士団は強く浄土教の影響を受けた．修験道では，特にこうした滅罪のための修行が重要視され，その檀家は「滅罪之方」「滅罪檀家」などと呼ばれた．

越生には「武蔵國大平山略図」という題の絵図が残されている．この絵図に描かれているのは，熊野信仰を具現化する黒山三滝・大平山・熊野神社をはじめとして村内にあった様々な信仰施設である．

高い山の峠（乗っ越し・鞍部）を越える「山岳交通路」には，「交易（流通）の路」・「軍事（政治）の路」・「信仰の道」・「生活（生計）の径」という四つの役割が考えられる．

この度の踏査ではこれらの信仰施設や石造遺物を調査することで，中世から近世にいたる山岳・尾根をたどる山岳交通路が果たす役割について考察することを目的とした．

注：この文章の一部は『越生の歴史Ⅰ（原始・古代・中世)』を参考にしました．

第４回『奥武蔵の修験遺跡』～黒山から大平山・越上山～（実施日：2022 年３月 26 日，参加者数：5 名）

概要：黒山三滝の南方に位置する大平山（オオビラヤマ）は，三滝とともに黒山熊野霊場の中心的な聖地であった． 標高 532 メートルの山頂付近は尾根筋に沿って東西方向に長く，その名の通り平坦になっている．役行者と前鬼・後鬼の石像が祀ってある．また，わきには元治元（1864）年に「西戸邑講中」によって安置された不動明王と勢至菩薩の石像がある．役行者の前では山本坊だけでなく，多くの修験者が採燈護摩という火を用いる儀礼を行っていたようだ．

大平山への登山路は黒山三滝の天狗滝の横から登る道が一般的だが，黒山の人達は，元旦に初日の出を拝むために小字岡坊から山道を利用して大平山へ登った．なお，大平山から真西の方角には吾野との境になる山が連なり，そこを飯能側では大峰山と呼んでいる．これをさらに西方にさぐると秩父の三峯山にあたっている．

坂尻から岡坊を経る山道には，『越生の歴史Ⅰ』中の図「黒山霊場の景観」および「慶長検地帳にあらわれる地名と朱印地」から察すると，古道としての信仰景観が遺されていると考えられる．なお，『新編武蔵風土記稿 入間郡 越生郷 黒山村』の記述には大平山の記事は見当たらない．風土記稿曰く「村内に一條の道あり．大満村より入村の中程にて二條にわかれ．一は高麗郡へ達し．一は

秩父郡へ達せり」と記す．前者は顔振峠道をさし，後者は高山道を指すものと思える．

大平山には大勢の人々が参詣のために登っていた．幕末の慶應３（1867）年に，山本坊配下の修験，坂戸市北大塚の万宝院は「大平山梵天講中」を率いて，８月中旬に二回にわたり都合 100 名の参詣登山を果たしている．「国峯修行」の場としての黒山霊場の設置は，信仰を寄せる信者・檀那たちの要求に応えるだけのものではなかった，越生や入西郡などに活躍する，たとえば小用福寿寺・厚川万福寺などの山伏に修行場を提供する「修験のセンター」にもなっていたのであろう．ことに山本坊が管理してから，西武蔵国地方における修験のセンター的存在だったのだろう．

現在では地元黒山地区を中心に越生聖護院門跡講中によって大平山役行者の縁日にあわせて毎年４月上旬に大平山登拝が行われている．
『ものがたり奥武蔵』に，「大平山から橡峠，顔振峠の主稜上に向って登ると，黒ツイジと呼ぶ場所があります．ツイジとはツキジ（築地）ともいう地方もあり，一般に石垣や堤を指す方言で，それが自然的な山岳の類似の地形にあてはめられた地名です.」黒ツイジにはいくつもの岩が積み重なっており，天然の石垣となっているようである．

越上山（オガミ山）は黒山村の山域である．風土記稿中に「登り二十町もあるべし．山上に秣場あり．又雑木並ひ立り，絶頂より望めば．郡中の村々は更なり江戸の方迄も遙かに見るべし」と記されているがその登路を詳らかにしていない．明治四十年測図の陸測図にも黒山笹郷からの直接路もみえないので，顔振峠からの現行の山道と同じと考えて良いのだろう．古くはこの山頂に諏訪神社が祀ってあったと云われ古諏訪山あるいは拝み山とも呼ばれている．高麗郡側から山伏入りの谷がこの山容を形成しているのは注目して良いだろう．

第５回『あまでら道（子の権現道）』−平九郎の辿った跡を訪ねて−（実施日：2022 年４月 30 日，参加者数：５名）

概要：峠には表と裏があると云われている．様々な人びとがさまざま目的をもって異境の人びとと交流をする機会を提供する場が峠である.この場合の峠の表と裏とは寺社の表参道･裏参道といった意味合いにも通ずるのだろうか・・・.

入間郡と高麗郡をつなぐ顔振峠もまた，「交易（流通）の路」･「軍事（政治）の路」･「信仰の道」･「生活（生計），生業の径」としての役割を古代から果たしてきた．

「子ノ権現道」は古代・中世には徒渉の多い高麗川筋を辿るよりも，古鎌倉街道上道からわかれた「志かうし（慈光寺）みち」を，越生津久根の三叉路で「あまでら（天龍寺）」の道をとることで黒山から顔振峠を越えて，芳延参道から子ノ権現へ参ったようである．

飯能から中藤川沿いの丁名石の遺る道が子ノ権現参詣路の表参道だとされているので，顔振峠からの参道は裏参道になるのだろうか．子の権現参詣路は七口あるが，小丸（床・正丸）峠を越える子ノ権現参詣路に小床参道がある．

黒山からの高山表参道は古老の唱える「四寸道」といわれ「たかやまみち（四寸道）」が表参道だとされている．

『武蔵野話』(1815) には「越生領黒山村に嶺（とうげ）あり．北方より向うは高麗郡長沢村なり．この嶺をカアブリ嶺といふ．按ずるにこの嶺は秩父山の入口にて嶺のはじまりなり，終の嶺を足が窪嶺といふその頭に有ゆゑ冠嶺（かぶりとうげ）といふ．方言にてカアブリと唱る故に本字を失うとおもはる」と記されている．

なお,『新編武蔵風土記稿』には,「カハブリ峠」（黒山村）及び「杉ノ峠(カアフリ峠とも…)」（長沢村）と表記されている．『武蔵通志』（山岳編）中の東山，一名杉嶺はこの峠のことだろうか．

越生龍ヶ谷の龍穏寺・飯能吾野高山の不動堂・南の天龍寺（通称子ノ権現）・名栗の龍泉寺をつなぐ龍の民俗話は昔の雨乞い祈願が各地の峠を越えてつながっていることを伺わせるのに充分である．雨乞いに関わる祈祷・祈願には山岳修行者が多く関わっている．この場合には修験者としても良いだろう．

龍ガ谷の龍穏寺の始まりは「龍穏寺縁起」によると慈光寺の末寺的な天台寺院だったと云われ，高山不動堂の不動明王の別当は新義真言寺院だが，創建時の三輪神道系と薬師如来坐像があることから平安時代には天台寺院の可能性があり,「子ノ権現御縁起」によると子ノ権現別当の天龍寺は天台寺院，名栗の龍泉寺は龍穏寺ノ末寺である．越生の「ひじりだいごんげん」として信仰を受けていた子ノ権現は飯能の天龍寺から勧請された．いずれの寺院にも山岳修行者が存在していた形跡がうかがえる．

時枝努氏は『「山岳寺院創建の背景に，山岳信仰の対象となった湧水や磐座が存在する場を聖地とする概念が存在する・・・,「聖地は行場としても好適な場所であり，山岳寺院が僧侶の修行の拠点となったことも十分に考えられ・・・，むしろ，平地寺院と密接な関係が見いだせる山岳寺院が多いのは，山岳寺院が平地寺院の僧侶が修行する場として機能していた可能性を示唆する・・・」」と山岳修行と湧水・磐座との関係を説いている．

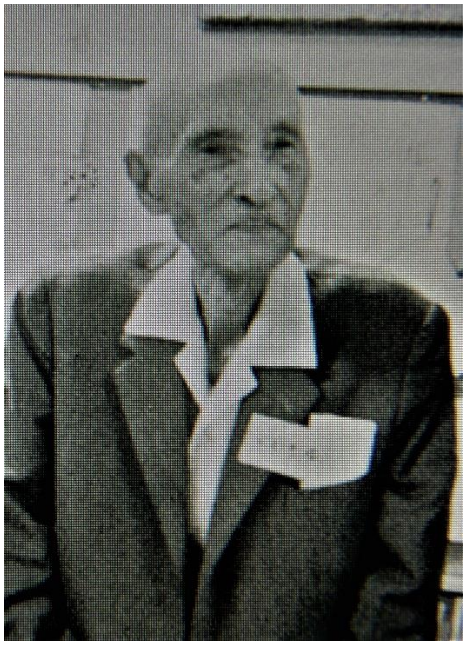
参考文献

水野章二 2015『里山の成立：中世の環境と資源』吉川弘文館
久保田謙治 編 2021『これでいいのか登山道−よりよい「山道」をめざして−』登山道法研究会
毛呂山町歴史民俗資料館 2018『第２０階回特別展解説図録 山・寺・ほとけ～毛呂山の仏教文化と修験～』毛呂山町歴史民俗資料館
坂詰秀一編 2003『仏教考古学事典』雄山閣
昌平坂学問所地理局編纂 1830「新編武蔵国風土記稿（浄書稿本)」
河田羆 1891-1892『武蔵通志（山岳編)』日本山岳会会報「山岳」秩父号 1916 年 第 11 年第 1 号
近藤雅幸 2022「選定１２０古道のたたき台を発表さらに検討・調整を重ね最終決定へ」『日本山岳会会報「山」』 No. 923
越生町教育委員会 1997『越生の歴史Ⅰ〈原始・古代・中世〉』越生町

「山の本棚」シリーズ

会員　小原茂延

山の本棚　No.4　田部　重治



年譜(「山岳」追悼より抜萃)

明治 17 年 8 月 4 日　富山市に近い山室村字東長江の農家南日喜平の三男として誕生

〃 33 年　「文庫」の小島烏水の紀行文をはじめ大町桂月他を愛読した

〃 35 年　金沢の第四高等学校入学
早期の登山家林並木教授の影響

〃 38 年　許嫁の田部家の次女結核で病没、東京帝国大学英文科入学

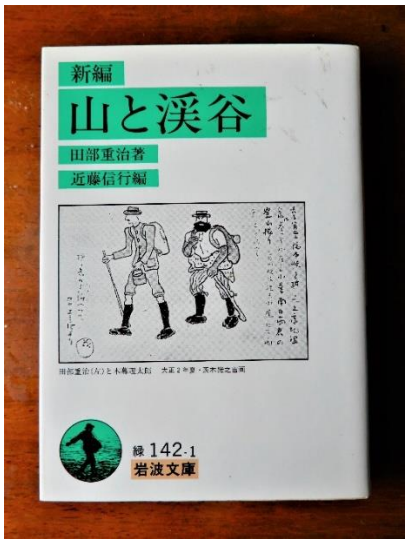
〃 39 年　木暮理太郎を知る

〃 41 年東大卒　8 月帰途妙高山に登る。
11 月木暮と高尾山に登る

〃 42 年 1 月　郁文館中学の英語教師
春から天台宗大中等部他兼任
5 月木暮と雲取山へ初めて野営
7 月弟,甥らと案内人で立山登山
8 月有峰から薬師岳に登る
10 月　木暮と十文字峠,甲武信岳，金峰山に登る。

(たなべ　じゅうじ)

「山と渓谷」岩波文庫　1993.8



「山と渓谷」は「日本アルプスと秩父巡禮」1919(大正 8 年)刊を改題したものである。

所収

山に入る心
山は如何に私に影響しつつあるか
(山への畏敬：私の精神的支柱となっている)
槍ヶ岳より日本海まで
笛吹川を遡る
数馬の一夜
　他

□『笛吹川を遡る』

笛吹川東沢渓谷の美しさを讃えた不朽の名作で、国語の教科書(文部省高等国語「一上」昭和 22 年新制高校用)に載る。この文章の一節が文学碑として西沢山荘近くのカラマツ林の中に平成 2 年に建立されている。(旧三富村による)巨大な花崗岩(登山靴形、自動車型)に刻まれた銘文は以下のとおり

「笛吹川を遡る」
見よ　笛吹川の渓谷は
狭り合って上流の方へ
見上ぐる限りの峭壁をなし

12 月　日本山岳会に入会(No.243)
木暮に勧め大正 2.9 入会 No319

明治 45 年 3 月中村清太郎と丹波山村から飛竜山に登り大菩薩峠へ登った。帰途**大黒茂谷**に迷い込み雪中一夜をあかし救援を得る。

7 月木暮と雁坂峠を越えて甲武信岳まで縦走した後、梓山から単身赤岳、御嶽、上高地、槍ヶ岳を経て富山へ帰る。

大正 2 年 5 月　木暮・中村とで金峰・国師・甲武信岳に至り一旦梓山へ下った後、再び甲武信に登り破風山から雁坂峠を経て栃本へ下る。

〃8 月　木暮と槍ヶ岳から日本海までの縦走をガイドレスで計画し見事に成功した。五色ヶ原で中村と待ち合わせたのち、長次郎の案内で剱岳にも登った。

大正 4 年 5 月　木暮・中村と笛吹川東沢を初遡行して梓山へ下る。

〃8 年 6 月慶応義塾山岳会主催の講演会で**「山は如何に予を影響しつつあるか」**を講演する。

この年日本山岳会の幹事となる。

大正 12 年年 9 月追分の油屋に逗留中関東大震災にあう。翌年、西大久保から阿佐ヶ谷へ新築移転。

昭和 38 年春頃、秩父鉄道より雲取山にレリーフを建設したい旨の申し出があり承諾、翌年夏、娘らとレリーフにまみえる。80 歳は特記に値する。

昭和 47 年 9 月 22 日逝去、享年 88 歳

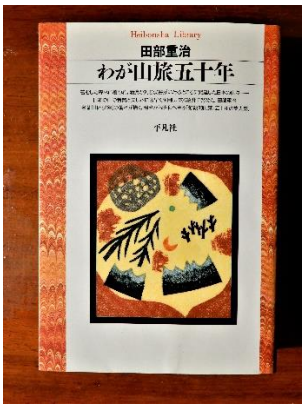
其間に湛へる流れの紺藍の色は
汲めども盡きぬ深い色をもつて
上へ上へと續いて居る
流れはいつまで斯の如き峭壁に
さしはさまれてゐるのだろうか

田部重治

碑文は田部の紀行文から**近藤信行**が撰文した。

□その他著書

「わが山旅五十年」1996 平凡社ライブラリー
(1964 年に桃源社より刊行されたものが底本)



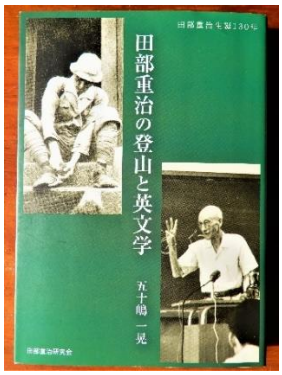
カバー抜萃、「日本の山の特質と美しさに注目し広く紹介した田部の山旅五十年の集大成」とある。

□研究書

「田部重治の登山と英文学」

2014　著者　五十嶋一晃は埼玉支部会員

田部の「山の先駆者」「英文学者」の両面を紹介



新入会員　自己紹介

事務局長　林　信行

《飯村 俊夫　　会員番号 16865 》

2022 年 2 月入会の飯村俊夫です、出身は北海道です。会社生活卒業後 OB 仲間と山歩きを再スタートし、ヨーロッパアルプスも体験できました。その絶景はもとより、老若男女問わず山での語らい・友好など思い思いにエンジョイしている様に感動しました。皆様と幅広く山に親みなにより安全登山に努める所存です、よろしくお願い申し上げます。

《坪井 沙也子　　会員番号 16866 》

4 月から埼玉支部に入会いたしました坪井沙也子と申します。埼玉県に引っ越して来て 1 年程で、埼玉の山については未だ知らないことだらけですが、先輩方に学びながら登山の幅を広げていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

《磯崎 佳奈　　準会員番号 A0411 》

　この度入会させて頂きました磯崎佳奈です。NHK の日本百名山が入会のきっかけです。植物画をやっているので花の山に憧れます。登山経験はありません。ご迷惑おかけしないよう頑張ります。よろしくお願い致します。

《宮田 しのぶ　　準会員番号 A0451 》

はじめまして　宮田しのぶと申します。低山　初心者コースを 7 年ぐらい前からゆるく過ごしてきました。これからステップアップして、登りたい山に行けたらなと思います。知識も経験もないのでご迷惑をおかけしますがよろしくお願いいたします。

事務局からのお知らせ

事務局長　林　信行

埼玉支部会員　在籍者数及び異動

2022 年 6 月 1 日現在

会員	126 名	準会員	18 名	計	144 名

【入　　会】

会　員			準会員		
16862	大室　昌久 (川越市)	1 月	A0411	磯崎　佳奈 (所沢市)	2 月
16865	飯村　俊夫 (所沢市)	1 月	A0427	飯野　和子 (さいたま市)	1 月
16868	丹治　三恵子 (豊島区)	2 月	A0429	吉田　湖恵 (上尾市)	2 月
16866	坪井　沙也子 (川口市)	2 月	A0451	宮田　しのぶ (比企郡)	4 月

【退　　会】

会　員			準会員		
8772	勝山　康雄	3 月	A0379	皆山　京子	3 月
11202	三角　朗	4 月	A0203	立田　朋子	4 月
13795	宮川　美知子	3 月	A0226	金光　正一	4 月
15598	梶野　登	3 月	A0427	飯野　和子	6 月
16490	根本　勇哉	3 月			
16559	辛　眞談	3 月			

《お願い・お知らせ》

■　登山届の提出について

日本山岳会では会員・準会員に対し会の山行、個人山行時に「登山届」の提出が義務付けられています。必ず山行の際には事務局　林まで提出してください。また、下山連絡も忘れずに！

当方より本部遭難対策委員会に転送致します。

送り先：支部事務局　mail：takenoko001@gmail.com ⇒本部 遭難対策委員会

FAX：　049-289-1128

日本山岳会創立 120 周年記念事業関連

＊＊＊ 講演会･講習会 ＊＊＊

■　全国古道調査関連講演会

＊　演題：「峠歩きは面白い」

（講師：埼玉県立川の博物館 研究交流部　部長 大久根 茂 氏）

＊　8 月 11 日（木・山の日）

＊　埼玉会館（13:30～15:00）ラウンジ

＊　50 名（申込順 会員外も可）　無料

■　「山の天気ライブ」

＊ 11 月 19 日（土）～11 月 20 日（日）

＊ 講師：猪熊 隆之氏　（山岳気象予報士）

＊ 座学 19 日（土）　　ソニックシティ　30 名募集

*フィールドワーク 20 日（日）

　　芦ヶ久保 丸山　15 名募集

＊　参加費：500 円

【編集後記】

新緑の美しい季節になりました。

ここにきてようやくコロナによる行動制限も緩和され活発な山行報告が聞けるようになり明るい気持ちになります。まさにウイズコロナの時代に入った感があります。

ここで一つ提案ですが、会員の皆様の声を広報誌に反映させたいと考えています。

山への想いや、日頃感じていること、または一押しの記事などをエッセイ風に書いていただけたら会員同士の交流も深まるのではと思います。できれば次回の３７号からスタートしたいと思います。皆様の負担にならないようにしたいと思いますのでご協力よろしくお願いいたします。

広報委員長　橋本久子

公益社団法人日本山岳会 埼玉支部報　第 36 号　2022 年 6 月 15 日発行

発行者：公益社団法人日本山岳会 埼玉支部　支部長　大山光一

事務局：350-0201 埼玉県坂戸市赤尾 1910 林信行方

電　話：080-2256-4829　　Email: stm@jac.or.jp

埼玉支部ホームページ：https://jac1.or.jp/saitama/